

平成28年度 福島大学大学院人間発達文化研究科入試問題

専攻(領域)名	地域文化創造(日英言語文化)	科目名	日本語
---------	----------------	-----	-----

受験番号	
------	--

文章を読んで、以下の設問に答えよ。解答はすべて日本語で記述すること。

言語のしくみは音韻・文法・語彙に分けて考えると便利だが、その言語を場面に応じてどう使うかは、その一段上に立つ規則である。敬語の用法とかかわるが、もう少し大がかりなことばづかいの規則・慣習が、どの言語・文化にもある。「社会言語学的能力」とか「コミュニケーション能力」と呼ばれる。

たとえば出かけるときや、食事を始めるときに、決まったあいさつことばを言うかどうかは、言語によって異なる。歩いている体がふれたときに謝るか、運転していて車が接触したときに謝るかも、文化によって(または自動車保険のかけ具合によって?)異なる。タブー現象もここで扱われる。日本では結婚式では「切る」「別れる」は口にすべきではないし、受験生には「落ちる」「すべる」が禁句である。以前に大学入試の朝、雪が積もったことがあった。門で受験票確認の先生がスピーカーで「すべりますからご注意ください」とアナウンスしたが、他の先生に苦笑いが広がり、しばらくしたら年配の先生が代わって、「足下にご注意下さい」と言いかえてアナウンスした。

このようなことばの使い方についても、難易度の差がある。何を言うか、言わないかについての習慣が数多く、細かく定まっている言語は、絶対的難易度が高い。相手や場面によって違くと、多種類を覚えなければいけないから、難易度が高い。また、決まりや掟を破ったときの罰則が厳しい言語も難易度が高い。昔の漁業・狩猟には、海や山で獲物をとるために、色々なタブーがあり、いみことば(忌詞)といって、別のことばに言いかえたりした。うっかりそれを破ったときに海にまたは雪の中に投げ込まれたというから、厳しい罰則であり、絶対的難易度が高いことになる。落語の「しの字嫌い」では「し」の付くことばを言うかどうかで、給金をかけることになっているから、高くつく罰則である。

相対的難易度は、母語とともに身に付けた言語行動をもとに判断される。まず、習っていることばの行動面での絶対的難易度に左右される。ことばづかいにうるさくない言語は、難易度が低い。次に、すでに母語とともに身に付けた言語行動と似ていれば、いちいち覚えなくてもいいし、類推がきくから楽だ。同一文化圏に属する場合がそうだ。例えば葬儀のとらえ方が日本と欧米のキリスト教圏で違い、日本では死を悼み、悲しむ方にことばの上の焦点があるが、キリスト教では「神に召された」「苦しい現世を離れて天国に行く」と考えて、それほどことばの上で嘆かない傾向があるようだ。文化圏の違うところでこのような背景を知らずに行動すると、誤解を招く恐れがあるから、相対的難易度が高くなる。

日本の言語行動には、戦後大きな変化があった。西洋化、欧米化、アメリカ化といわれる現象である。これによって、欧米文化の持ち主にとっては、日本語の使い方の難易度が下がった。また日欧の両方の基準が同居していて、どちらの基準も理屈にかなっていることから、欧米風の基準で行動しても非難されることが少なくなった。おみやげをもらってすぐ開けたら、昔は不作法だが、今はアメリカ風である。

近代の変化が際立つ言語行動は、食事どきのおしゃべりである。食卓がお膳(銘々膳)からちゃぶ台に替わり、その後テーブルに替わるのと連動する形で、「黙って食べる」から「おしゃべりをしながら楽しく食べる」に変化した。ただし、口の中にどの程度ものを入れてしゃべっているかについては、欧米のエチケットが導入されなかった。食べながらおしゃべりをするというテレビ番組の観察によると、口の中をいっぱいにしてしゃべる人が結構いるということである。聞かれたらすぐ答えようとするのだろう。育ちのいい欧米人が、会話がとぎれることもかまわずに全部呑み込んでからしゃべろうとするのとは違う。そばを食べるときにも、音を立てなくなった。

教室でのおしゃべりも変わった。昔は騒ぐと体罰があったが、今はない。立ち上がって動き回り勝手にしゃべるという学級崩壊が今は問題になっている。また、大学生の私語が話題になる。もともと、最近はケータイメールでやりとりするので、教室が静かになったという。学生が講義を聞かない点では同じだが。

期待される会話の量にも変化がある。以前には「男は黙って〇〇〇〇ビール」というコマーシャルもあり、男はおしゃべりしないのがいいとされていた。しかし、今は男女差が色々な面でなくなった。話題のレポーターについても男女差が薄れた。「男女同権」は当たり前で、今や廃語である。

自分の考えをすぐ口に出すか、結論を言わず、むしろ最後まで待って相手に言わせるかなどについては、まだ日本風の奥ゆかしさが尊ばれる。欧米人もアジア人も、日本人から見ると「攻撃的だ」とか「ずうずうしい」という印象を与えることがある。帰国子女も、そんなところで周囲の抵抗を受けるようである。頭の中の考え方も違いますが、言語行動として外に出す段階での違いと見ていい。自分がどう考えようと、それを表に出さない限りは周囲では意識しない。ただし不便なことに欧米の文化では「自分の考えをはっきり言いなさい」としつけられるから、帰国して摩擦が起こりやすくなる。

(井上史雄『日本語は生き残れるか』より。一部を改変。)

問1.本文中で論じられている「ことばの使い方の難易度」について、下線部A「絶対的難易度」と下線部B「相対的難易度」の違いを明確にして、日本語で説明しなさい。

問2.本文中で述べられている問題について、あなた自身が日本で経験したり感じたりしたことを踏まえて自分の考えを日本語で自由に論じなさい。